

序

ESDは内視鏡治療の1つの術式であり、その術式には多くの流派があると思います。使用するデバイスはもちろんのこと、局注液、スコープ、フードに至るまで、流派なりの理由やこだわりがあるでしょう。どれが正しいという答えはないと思いますが、個人的にはあれこれ流派を混じない、純血主義をお勧めします。すべての手技に一貫した理由付けがあって納得しやすいからです。私は良くも悪くもESDの技術を独学で学び、そのスタイルをつくり上げてきました。ほとんど他の先生の影響を受けていません。ゆえに一般的に言われていることと異なる手技も多々ありますが、その1つひとつに私なりに理由付けと信念をもってやってきました。幸い若輩者なりに後進を育てる機会にも恵まれ、今では当センターを離れて独立して安定した治療成績を上げている先生も少なくありません。私の流儀に大きな間違いはないであろうことの証明ではないかと嬉しく思っています。ただ、これはあくまで私のやり方であり、決してこれが正しいとは限らず、当然押しつけるつもりもありません。理解・納得できたら、よかつたら真似してみてください、というだけです。

これまで指導のたびにいつも同じ話や同じような図を書いて説明してきましたが、その走り書きの図をずっと大切に持っている研修生や、それをコピーしている研修生も少なくありませんでした。教え子が増えると、「大圃先生のESDの指導をまとめてほしい」、「教科書のようにまとめた本はないのか」という声も強くなってきました。そんな折に羊土社の鈴木さん、野々村さんより「教育に力を入れている大圃先生の技術を普及させるための本作りをしてみませんか？」という渡りに船の依頼をいただき、挑戦してみることにしました。

この本は少しESDの経験がある初級者から中級者、なかなか上達できない先生達を対象に、3章立てとなっています。私と当センターの 트레이ニーだった港君との指導のやりとりを記録したものがベースになっています。第1章は、ESDそのものの技術論ではなく、ESDを行う前に取得しておくべき内視鏡操作法についてです。実はここに第2章以降の手技を完成させる基本操作が詰まっています。ESDがうまくできない人は、皆この基本操作ができていないのです。この操作ができるようになってからESDを始めると驚くようなラーニングカーブを描いていきます。興味をもってもらえず読み飛ばされそうな章かと思いますが、しっかり理解してみてください。第2章は一連のESDの手技のなかの細かいコツを集めました。それを積み上げてESDが完成されていきます。どのくらい細かい視野、イメージで操作をしているのか、それを伝えるために動画をたくさん使っています。第3章は第1章、第2章をふまえた実際の症例での操作を、当セ

ンターで指導している現場での様子を動画を交えて解説しました。ただの読みもので退屈にならないように少しでも臨場感を伝えられればと思っています。

上達できないことを“センスがない”と片付けるのは簡単なことです。私は“上達できないのは指導者の責任である”と考えています。だから上達できないのはセンスがないのではなく何か理由があるはず、その人ごとの理由をくり返し私なりに解析してきました。上達できない人をできるようにすること、そのための方法を伝えられることが指導であると思います。この本では、私自身が現時点で解析してきた上達するためのコツを、皆さんに少しでも伝えられたらと思っています。

2016年9月

NTT 東日本関東病院 内視鏡部

大圃 研